

## NICU における直接授乳に関する文献検討

著者	嶋田 あゆみ
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	12
号	1
ページ	61-66
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00010461/">http://id.nii.ac.jp/1145/00010461/</a>

## [総説]

## NICUにおける直接授乳に関する文献検討

嶋田 あゆみ

北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士課程

## キーワード

NICU, 低出生体重児, 直接授乳, 支援

## I. 緒言

子どもにおける母乳育児の利点として、成長・発達にとって必要なあらゆる栄養もしくは免疫成分が母乳によって満たされること、良好な発達・発育が促進されること、多くの急性・慢性疾患のリスクが低下することが明らかにされている。特に早産児における母乳の利点として、壊死性腸炎、遅発性敗血症、未熟児網膜症の発症リスクの減少、1年以内の再入院のリスク減少、神経学的発達予後の改善などが報告されている。また、母乳育児は母親にとっても大きな利点が多数存在し、さらに医療費節減など、社会・経済的にも大きな利点がある(瀬川, 2015)。

新生児集中治療室(以下、NICUとする)に入院する新生児は母子分離となり、早産児の場合はその未熟性や治療の状況から、すぐには直接授乳をできないことが多い。早産児は覚醒度が低く、吸啜などの哺乳行動も未熟であるが、毎日の成長のなかで徐々に成熟し、最終的には安定して乳房から母乳を飲みとることができるようになる(山口, 2015)。そのためNICUで働く看護師には、児の状況や哺乳行動のアセスメントを行い、長期的な視点をもって直接授乳を支援していく姿勢が求められている。

このようにNICUにおける直接授乳支援は重要であるが、母子分離の状況における母乳育児に対する医療従事者の知識・技術が不十分であること、NICUの母乳育児支援に関する医療従事者や母親教育のための専門スタッフも、プログラムも用意されていないことが指摘されている(大山, 2010)。

NICUにおける母乳育児支援の近年の動きとして、日本新生児看護学会が日本助産学会に協力を要請し、2006年にNICU入院児の母乳育児支援委員会が設立され、2010年にNICUに入院した新生児のための母乳育児支援ガイドライン(以下、ガイドラインとする)を発表した。ガイドラインによると、NICUに

における母乳育児支援の骨子は、1)直接授乳ができない間は搾乳し、母乳を栄養チューブから与える、2)直接授乳が可能となるまで母乳分泌を維持する、3)直接授乳を成功に導くである。特に、直接授乳を成功に導くには、看護者による出産直後からの精神的サポート、情報提供や助言が不可欠であり、特別な技術が必要である(平成18年度・19年度NICU入院児の母乳育児支援委員会, 2010)。ガイドラインによりNICUにおける母乳育児支援の内容を標準化することで、NICUに入院した新生児と母親が、どの施設においても一定水準の標準的な支援が受けられることを目指している。

そこで、NICUにおける直接授乳に関する研究を概観し、ガイドラインにそった支援内容がどの程度普及しているのか、NICUにおける直接授乳支援の実態と課題を明らかにすることを本研究の目的とした。

## II. 用語の定義

本研究における「直接授乳」は、母親の乳房から直接授乳することと定義した。

## III. 研究目的

NICUにおける直接授乳に関する研究を概観し、NICUにおける直接授乳支援の実態と課題を明らかにすることである。

## IV. 研究方法

## 1. 文献の選定

医学中央雑誌 Web版 Ver.5を利用し検索した。検索のキーワードは「直接授乳 or 直母」and「NICU or 低出生体重児」とした。2005年から2015年の10年間を対象として検索したところ、95件が該当した。そのうち、会議録、解説・特集を除く32文献を分析対象とした。

## 2. 分析方法

対象とした32文献を発行年および調査開始年、研究方法、対象者、研究目的で分類した。さらに、これらの対象文献で明らかになっているNICUにおける直

## &lt;連絡先&gt;

嶋田 あゆみ

北海道医療大学大学院看護福祉学研究科

E-mail: shimayu@hoku-iryu-u.ac.jp

接授乳支援の実態と課題を検討した。

### 3. 倫理的配慮

公表されている文献のみを用いた。

## V. 結果

### 1. 発行年および調査開始年

研究の概要を表1にまとめた。文献は発行年の古い順に並べた。

対象とした32文献の発行年は、2005年3件、2006年2件、2007年2件、2008年5件、2009年5件、2010年2件、2011年2件、2012年2件、2013年4件、2014年2件、2015年3件であった。

調査開始年をみると、1998年1件、2001年2件、2003年2件、2004年1件、2005年1件、2006年5件、2007年7件、2009年3件、2010年1件、2011年2件、2012年2件、2013年1件であった。

### 2. 研究方法

研究方法を分類すると、質的研究が8件、量的研究が22件、混合研究が1件、分類不能が1件であった。

質的研究のうち、質的記述的研究が4件、事例研究が4件であった。量的研究のうち、量的記述的研究が19件、仮説検証型研究が1件、準実験研究が2件であった。

### 3. 対象者

これら32文献の対象者をみると、母親のみを調査対象者とした文献は11件と最も多かった。次いで児を対象者とした文献が9件、看護師を対象者とした文献が8件と多かった。母子を対象者とした文献は4件であった。

調査対象とした施設をみると、全国単位の調査は1件のみで、他は一施設を対象としていた。

### 4. 研究目的

32文献を研究目的別に分類すると、支援の実態に関する文献が12件（文献番号1, 8, 9, 10, 11, 19, 20, 23, 25, 27, 28, 29）、哺乳行動に関する文献が6件（文献番号2, 3, 5, 6, 7, 12）、母乳育児の関連要因に関する文献が5件（文献番号4, 13, 14, 16, 17）、母親の思い・体験に関する文献が4件（文献番号18, 24, 26, 32）、新しい支援の試みに関する文献が2件（文献番号22, 30）、スタッフ教育に関する文献が2件（文献番号21, 31）、搾乳量の推移に関する文献が1件（文献番号15）に大別された。

### 5. NICUにおける直接授乳支援の実態と課題

支援の実態に関する12文献と、新しい支援の試みに関する2文献の合計14文献をもとに、直接授乳支援の

実態と課題を検討した。

NICUにおける母乳育児指導の実情と課題の全国調査（横尾・宇藤・木下・長内・村木・粟野・岡永・高田, 2008）は、出産後最初の指導、母親退院、最初の直母、新生児退院という4つの場面で構成されている。最初に直母を行う際の指導内容として、ポジショニングや吸着の方法については9割を超えたが、吸啜のサインや吸啜がうまくいかない場合の対処については8割を切っていた。また同調査では、NICUにおける母乳育児支援体制として、基準やマニュアルがある施設は6割にとどまり、ハイリスク新生児のためのガイドラインを必要とした施設は9割近くであった。さらに、母乳育児を支援する上で困っていることとして、専門的な知識を持つスタッフが少ないことを8割、指導に十分時間が取れないことを7割、マニュアルが整備されていないことを5割の施設が認識していた。

直接授乳支援の実態として、早期接触、早期授乳（時田, 2011）、分娩後2時間以内からの搾乳指導の実施（松島・西川・本山・松木, 2008）、母乳分泌の機序や乳汁生成各期に応じた支援（亀山・出地・鈴木・深澤, 2013）等、直接授乳を成功に導くための鍵となる支援が報告されていた。また、BFH（赤ちゃんにやさしい病院）を目指してNICUにおいてカンガルーケアやディベロップメンタルケア等に取り組んだ施設では、NICUの早産児でも早期からの母乳哺育開始、母親の授乳参加、母乳比率の向上、早期の直母開始が達成されていた（五十嵐・炭谷・橋田・三谷・本間・野口・尾上・畑崎, 2005）。

一方で、直接授乳支援の自信のなさ（杉村・仁科・加藤・達家, 2012）、乳汁分泌・母体のホルモン分泌の理解不足、自信のなさ（乙坂・大川・佐藤・加藤, 2014）、自律授乳に対する知識不足（伊藤・横山・長谷川・安藤・犬飼・村田, 2013）等、母乳育児支援をするスタッフの知識不足や自信のなさの報告も複数みられた。

母乳育児支援に関する勉強会の開催の効果として、母乳育児支援の開始時期の早まり（西村・入江・米村, 2010）を明らかにした報告や、新しい支援の試みとして、早期授乳により母親の不安軽減につながったという報告（宇田・村上・入口・平田・佐藤雅代・竹中・佐藤美幸, 2012）がみられた。また、パネルを用いた早期指導の導入（荒川・大西・江南・辻本, 2015）も報告されていた。

また、NICU入院中の児の母親が乳房ケアを受けることで体と心の変化がみられ（江南・脇田・橋本・有城, 2008）、母乳育児支援活動が母親のエモーショナルサポートとなる（江南・脇田, 2008）との報告もみられた。

母乳育児支援の課題として、全国調査（横尾他,

表1 NICUにおける直接授乳に関する研究の概要

文献番号	著者名	発行年	表題	対象者	分析対象数	調査開始年	研究方法	研究目的
1	五十嵐他	2005	Baby Friendly Hospitalへの取り組みとNICUにおける早期産児の母乳哺育支援	児	102名	1998*	量的記述的	BFHとしての取り組み前の1998年度と後の2003年度を比較して、NICUにおける早期産児の母乳哺育支援状況につき比較検討する。
2	當間他	2005	母乳分泌維持、早期直接哺乳の確立にむけて-NNSの導入前後を比較検討して-	児	15名	2003	量的記述的	カンガルーケアと同時に早期母乳頭NNSを導入し、安全性および効果を検討する。
3	鳥袋他	2005	早産児における直接授乳とビン哺乳の呼吸循環動態への影響の比較	児	34名	2003	量的記述的	直接授乳の呼吸循環動態への影響がビン哺乳よりも少ないことを実証するために、直接授乳とビン哺乳の呼吸循環動態へ与える影響を比較し、直接授乳の開始時期をできるだけ早めることが出来ないか検討する。
4	近野他	2006	NICUの母乳栄養率と母乳栄養に影響を与える因子の検討	児	108名	2004	量的記述的	母乳率の実態を調査し、母乳栄養確立に影響を与える因子を明らかにする。
5	大山他	2006	低出生体重児における乳房からの哺乳行動の発達評価	児	19名	2005	量的記述的	低出生体重児の乳房からの哺乳行動の発達を評価するシステムを作る。
6	當間他	2007	NICUにおける母乳育児支援への取り組み-直接授乳からの経口哺乳開始とNNSの積極的導入について-	児	研究1:34名、研究2:50名、研究3:双胎34組	2001*	量的記述的	研究1:哺乳中の異常についてビン哺乳の群と直接授乳の群で比較検討を行う。研究2:カンガルーケア時にNNSを導入し、その効果を検証する。研究3:双子のNNSの効果を検証する。
7	大山他	2007	低出生体重児における乳房からの哺乳行動の発達評価	児	42名	2006	量的記述的	看護師がPIBBSにより乳房からの哺乳行動の発達を評価することが可能か否かを検討し、PIBBSを看護師がチームとして一貫した授乳支援ができるツールにする。
8	横尾他	2008	NICUにおける母乳育児指導に関する実情と課題	看護師長	112施設	2007	量的記述的	NICUにおける母乳育児指導の標準化や効果に関する基礎資料を得る。
9	江南他	2008	NICUにおける母乳育児支援の効果-母親たちの声から学んだところのケア-	母親	61名	2006	量的記述的	NICUに児が入院中の母親たちの感想ノートから母乳育児支援の効果を分析する。
10	江南他	2008	NICUにおける母乳育児支援活動の試み	母子	母親61名、児42名	2006	量的記述的	NICUに入院している児の母親を対象に行った母乳育児支援活動の試みを報告する。
11	松島他	2008	当院NICUにおける母乳育児支援の現状	児	116名	2007	量的記述的	当院NICUにおける早産児への母乳育児支援の現状を把握し今後の方向性を見出す。
12	大山他	2008	低出生体重児における乳房からの哺乳行動の発達評価	看護師	30名	2007	量的記述的	看護師がPIBBSを使用し、単独または家族と共に乳房からの哺乳行動の発達を評価をした結果を看護師へのアンケートを行うことで評価する。
13	渡辺他	2009	母子分離状態における母親の搾乳回数・搾乳量と産後1か月の児の栄養法との関連	母親	26名	2001	仮説検証型	入院中の搾乳回数・搾乳量が産後1ヵ月時点の児の栄養法に影響するという仮説を立て、母子分離のために吸乳刺激の得られない母親における母乳栄養維持のためのケアを見出す。
14	藤本他	2009	早産児の母乳育児における電動搾乳器の有効性	母親	10名	2006	準実験	母親退院後から直母開始までの期間における搾乳量と搾乳時間、搾乳に伴う痛みと疲労について明らかにし、電動搾乳器の有効性を検討する。
15	鎌田他	2009	超低出生体重児を出産した母親の母乳産生量はどれくらい維持されるのか	母親	1名	2007	事例	産後母子分離され、直母開始まで数ヵ月を要し搾乳を続けることが必要となる母親の、産科入院中および直母開始後児が退院するまでの搾乳量の推移と、修正月齢6ヵ月までの乳児の直母時搾乳量の推移を明らかにする。
16	岡山他	2009	母子同室を行っている低出生体重児の母乳育児に関わる要因	母子	140組	2007	量的記述的	母子同室を行っている低出生体重児の生後1ヶ月までの母乳率に影響する因子を明らかにする。
17	中上他	2009	当院における母子分離された低出生体重児の母乳栄養率と母乳栄養に影響を与える因子の検討	児	115名	2007	量的記述的	母子分離された低出生体重児の母乳栄養率と、母乳栄養率に影響を与える因子を明らかにし、今後のケアについて考える。
18	堤他	2010	NICUに入院した早産児の母親の搾乳の体験	母親	13名	2006	質的記述的	NICUに入院した早産児と母親の母乳育児に対する効果的な支援を検討するに当たり、NICUに入院した早産児の母親の搾乳の体験を明らかにする。
19	西村他	2010	NICUにおける母乳育児支援の向上への取り組み	看護師	13名	2009	量的記述的	NICU看護師に母乳育児支援に対する知識・技術の向上への取り組みを行った結果を報告する。
20	時田	2011	低出生体重児の母乳育児確立に向けた支援について	母子	1事例	記載なし	事例	正期産の低出生体重児が、入院中に母乳育児の確立に至った理由について、当院の取り組みと本事例を分析し、効果的かつ具体的な母乳育児支援の方法を検討する。
21	今井他	2011	NICUにおける直接授乳支援への取り組み	3年目以下のスタッフ	6名	2009	量的記述的	未熟児病棟経験年数3年目以下のスタッフを対象にし直接授乳支援マニュアルを使用することで自信を持って母乳育児支援を行えるのか検証する。
22	宇田他	2012	早産・低出生体重児の授乳開始はいつから可能か? -早期授乳を試みて-	母子	27組	2007	準実験	初回の経口哺乳から直母を行わせることが可能かどうか、また初回から直母を行わせることによる母親の不安が軽減したかどうかを検討する。
23	杉村他	2012	NICUにおける育児指導の実態調査と評価の分析-院外出生の親子への指導を振り返って-	母親、看護師	母親126名、看護師14名	2009	量的記述的	育児指導に対する母親からの評価とNICU看護師の指導に対する捉え方を考察し、統一された育児指導の必要性和段階的な看護師教育の必要性について明らかにし、今後の教育プログラム見直しに役立てる。
24	室津他	2013	超低出生体重児の母親の搾乳量と搾乳中の思い	母親	8名	2010	質的記述的	児が直接哺乳できるようになるまでの間の、超低出生体重児の母親の搾乳量の変化を知るとともに、搾乳を実施する過程で、どのような思いを抱えていたのかについて明らかにし、超低出生体重児を出産した母親への看護支援について検討する。
25	伊藤他	2013	NICU-GCUにおける退院に向けた授乳指導-母親の主体性を引き出す援助を目指して-	看護師	28名	2011	量的記述的	NICU-GCUにおける従来の授乳指導についての問題点を明らかにする。
26	亀山他	2013	直接授乳困難に陥っている低出生体重児を出産した母親の母乳育児に対する気持ち	母親	2名	2011	質的記述的	直接授乳困難に陥っている低出生体重児を出産した母親の気持ちを明らかにすることで、NICUにおける母乳育児支援の方向性について示唆を得る。
27	亀山他	2013	妊娠高血圧症候群を発症した母親への母乳育児支援-NICU看護師の立場から-	母親	1名	2012	事例	妊娠高血圧症候群に対し降圧薬治療している母親に必要な母乳育児支援を検討する。
28	佐藤	2014	早産・低出生体重で生まれた児をもつ母の不安を軽減する為の関わりを振り返って	母親	1名	記載なし	事例	経産婦で第一子が正期産、第二子が早産・低出生体重で生まれた児をもつ母親の不安を軽減するためにはどのようなサポートが必要か明らかにする。
29	乙坂他	2014	直接授乳支援に対する実態調査	看護師	10名	2012	混合	看護師の母乳に対する知識や直接授乳支援に対して、どのような不安や疑問を持っているかを明らかにし、今後の課題を明確にする。
30	荒川他	2015	NICUにおける母乳育児支援の具体的情報提供の試み-パネルによる早期指導の導入に向けて-	記載なし	記載なし	記載なし	分類不能	NICUにおける母乳育児支援についてパネルを用いて情報提供を試み、実態を紹介する。
31	松本他	2015	NICUにおける直接授乳介助のスタッフ教育についての実践報告	スタッフ	記載なし	記載なし	量的記述的	隣接する産科病棟の助産師と連携を図り実施した母乳育児支援教育の経過を報告する。
32	谷崎他	2015	超低出生体重児の母親が長期搾乳を継続していく中で抱く思いと継続を支える原動力	母親	10名	2013	質的記述的	超低出生体重児の母親が長期搾乳を継続していく中で抱く思いを明らかにし、搾乳継続を支える原動力を探る。

\* 既存データを利用した研究であったため、対象が出生しない入院していた年を記載した。



2008)では、出産後最初に行う指導の時期と内容の検討や、直母開始までのケア内容の充実、研修に対する看護者のニーズに応える必要性等が挙げられている。他には、継続支援(江南・脇田, 2008; 江南・脇田・橋本他, 2008; 松島他, 2008), 産科病棟の助産師との連携(杉村他, 2012; 西村他, 2010), 直接授乳に関連した教育プログラムの構築(杉村他, 2012), 母親の主体性を引き出す援助(伊藤他, 2013), 看護としての喜びを感じられるような環境づくり(乙坂他, 2014)が課題として挙げられた。

## VI. 考察

### 1. 研究の概要

2010年にガイドラインが出されたことを契機に、その後の研究数が増加すると考えられたが、調査開始年が2010年は1件、2011年は2件、2012年は2件、2013年は1件と著しい増加はみられておらず、ガイドラインが研究の増加に及ぼした影響はほとんどないと考える。

研究方法としては量的研究が最も多く、NICUにおける直接授乳支援について現状把握をしている段階であるため、このような研究デザインが選択されたと考えられる。準実験研究は2件と少なかったため、実践のエビデンスを確立していくために今後は実験的デザインを用いた研究が多く取り組まれることが期待される。

また、母乳育児支援の実態を明らかにするという実態調査が多くみられるが、全国規模の調査は1件のみで、他は一施設を対象とした調査であり、全国の直接授乳支援の実態を把握できなかった。全国規模の調査(横尾他, 2008)の対象者はNICU看護師長であり、看護師の考えや困りごと全てを反映しているとは言えない限界がある。NICUで実際に勤務している看護師を対象とした全国規模の調査が望まれる。

児を対象とした哺乳行動に関する研究は、掲載年が2005～2008年と古い。母親の思い・体験に関する研究は2010年以降に掲載され、いずれも質的研究が採用されている。2010年に発表されたガイドラインで母親の精神的サポートや自己決定の重要性が表現されており、それが反映されている可能性がある。

母乳育児支援に携わるスタッフの教育は重要であるが、教育に関する研究は2件と少なく、今後の発展が望まれる。

### 2. NICUにおける直接授乳支援の実態と課題

全国調査(横尾他, 2008)の直母指導については、初回と児の退院時の指導の2時点での調査であり、ここからはNICUの全入院期間の直母指導の実態を把握できない。NICUに入院する早産・低出生体重児や病児は、数か月単位の長い入院期間である場合も多

く、特に早産児においてはその特徴から哺乳行動の発達を継続的に観察し支援していくことが重要と言える。直母についての指導内容の標準化や効果の証明をするための基礎資料としては、入院期間を網羅するような調査範囲に広げること、NICU入院児の特徴に合わせた支援内容を反映するよう調査の視点をさらに充実させることが望まれる。

ガイドラインで推奨されている要点は10項目である。各項目がNICUに入院した新生児の母乳育児支援になぜ必要であるか、どのように行うかについて、標準的な考え方、知っておくべき知識、獲得すべき技術について説明している。これら10項目のうち、直接授乳の支援に該当する項目は、1)直接授乳の方法に関する基本的な情報を提供し、実行できるよう支援する、2)直接授乳を成功に導く方法に関する情報を提供し、実行できるよう支援する、3)新生児の状態にあわせ、母乳育児の過程を個別的に説明し、情報を提供する、の3項目である。

今回分析対象とした32文献のなかで報告されている、母乳分泌の機序や乳汁生成各期に応じた支援はガイドラインの項目1)に、早期接触や早期授乳については項目2)に該当する。これらは直接授乳を成功に導くための支援として、NICU入院児に限らず全ての新生児において非常に重要である。NICU入院児の特徴をふまえた支援を行うためには、上記に加え、哺乳行動の発達に応じた直接授乳の時期や方法を十分に理解することが必要である。直接授乳のステップと評価の視点等が述べられている項目2)と3)に関する学習を深め、哺乳行動の特性や変化を継続的に観察し、経過を判断した上で個別的な支援を行うことがNICU看護師に求められていると考えられる。

また、看護師の知識不足や自信のなさを挙げている研究が複数みられたことから、看護師の知識や技術が不足していることで自信もなく、そのため積極的な介入につながらない現状が推測される。NICUで働く上で必要な知識や技術は、看護基礎教育で修得した内容だけでは不足しており、NICUに配属される看護師に求められる学習量は多いといえる。それは、急性期に必要な高度医療や急変時の対応、母親を全人的に理解したうえでの母子関係形成に向けた支援、児の発達支援、母乳育児支援等、多岐にわたる。その中で母乳育児支援についてNICU看護師が必要な知識や技術を習得し、積極的に介入していくためのシステムが不足している可能性が懸念される。

さらに、各施設での取り組みの報告のなかには、施設単位での助産師主催の勉強会や、困ったときには助産師に助けを求めて解決しているという報告もみられた。近年、日本看護協会が検討を重ね日本助産評価機構により示された助産師の助産実践能力習熟段階を示すクリニカルラダーの申請条件には、母乳育児支援の

経験や研修は必須項目として挙げられていない。そのため、自立した助産師として認められた助産師が、必ずしも母乳育児支援に関する最新の知識や技術を持ち合わせているとは限らない。産科とNICUで情報を共有すること、母乳育児支援に関する経験の多い助産師に助けを求められる関係性は大切であるが、ガイドラインにそった支援を行えるNICUの看護師が育つこと、ニーズに応じた教育プログラムを充実させることが求められているのではないだろうか。

## VII. 文献

荒川愛子, 大西由紀子, 江南宣子, 辻本啓子 (2015). NICUにおける母乳育児支援の具体的情報提供の試み—パネルによる早期指導の導入に向けて—. 奈良県母性衛生学会雑誌, 28, 47-50.

江南宣子, 脇田満里子, 橋本綾, 有城利子 (2008). NICUにおける母乳育児支援の効果—母親たちの声から学んだところのケア—. 近畿新生児研究会会誌, 17, 55-59.

江南宣子, 脇田満里子 (2008). NICUにおける母乳育児支援活動の試み. 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 4, 58-62.

藤本紗央里, 横尾京子 (2009). 早産児の母乳育児における電動搾乳器の有効性. 日本新生児看護学会誌, 15(2), 2-10.

平成18年度・19年度NICU入院児の母乳育児支援委員会 (2015年11月27日). NICUに入院した新生児のための母乳育児支援ガイドライン. <http://square.umin.ac.jp/jam/bonyuikujisien%20gaidorain.pdf>

五十嵐登, 炭谷崇義, 橋田暢子, 三谷裕介, 本間仁, 野口正, 尾上洋一, 畑崎喜芳 (2005). Baby Friendly Hospitalへの取り組みとNICUにおける早期産児の母乳哺育支援. 小児科臨床, 58(8), 1659-1665.

今井里枝, 九島愛美, 泉直子, 野呂かおり, 奥村志乃, 佐々木恵, 林崎みどり (2011). NICUにおける直接授乳支援への取り組み. 函館中央病院医誌, 13, 50-54.

伊藤美紀, 横山智津恵, 長谷川憲子, 安藤菜摘紀, 犬飼文美, 村田佐知子 (2013). NICU・GCUにおける退院に向けた授乳指導—母親の主体性を引き出す援助を目指して—. 名古屋市立大学病院看護研究集録, 2011, 59-63.

鎌田雅子 (2009). 超低出生体重児を出産した母親の母乳産生量はどれくらい維持されるのか. 日本看護学会論文集: 母性看護, 39, 18-20.

亀山千里, トーマス京子, 門間智子, 深澤千映子 (2013). 直接授乳困難に陥っている低出生体重児を出産した母親の母乳育児に対する気持ち. 日本看護学会論文集: 小児看護, 43, 118-121.

亀山千里, 出地千種, 鈴木悦子, 深澤千映子 (2013).

妊娠高血圧症候群を発症した母親への母乳育児支援—NICU看護師の立場から—. 日本看護学会論文集: 母性看護, 43, 45-48.

近野知佳子, 宮腰有季, 田辺圭子, 後藤あき子 (2006). NICUの母乳栄養率と母乳栄養に影響を与える因子の検討. 日本看護学会論文集: 小児看護, 36, 71-73.

公益社団法人日本看護協会 (2015年11月27日). 助産実践能力習熟段階(クリニカルラダー)活用ガイド. <http://www.nurse.or.jp/nursing/josan/pdf/suishin/guide.pdf>

松本麻依, 渡邊美香 (2015). NICUにおける直接授乳介助のスタッフ教育についての実践報告. 栃木県母性衛生学会雑誌: とちほ, 41, 31-32.

松島里紗, 西川優子, 本山恵美子, 松木裕子 (2008). 当院NICUにおける母乳育児支援の現状. 近畿新生児研究会会誌, 17, 60-62.

室津史子, 今村美幸, 重本津多子 (2013). 超低出生体重児の母親の搾乳量と搾乳中の思い. 医学と生物学, 157(5), 603-610.

中上智恵, 石田貴子, 板井かおり, 尾崎百代, 掛水美都, 高見育世, 中内絹代, 中野のり子, 東出奈々恵, 前田祐香, 松本知佐, 三谷麻以, 山崎美幸, 渡辺希恵, 渡辺美香, 橋田寿子, 寺尾萬代美 (2009). 当院における母児分離された低出生体重児の母乳栄養率と母乳栄養に影響を与える因子の検討. 国立高知病院医学雑誌, 17, 71-75.

西村彩, 入江亜矢, 米村幸子 (2010). NICUにおける母乳育児支援の向上への取り組み. 済生会下関総合病院院内看護研究集録, 平成22年度, 10-14.

岡山佳奈, 富永嘉代, 宮川祐三子, 小出亜希子, 池内美貴 (2009). 母子同室を行っている低出生体重児の母乳育児に関わる要因. 大阪府立母子保健総合医療センター雑誌, 25(1), 17-22.

大山牧子, 上原さおり, 松波智耶, 村市美代子 (2006). 低出生体重児における乳房からの哺乳行動の発達評価. こども医療センター医学誌, 35(4), 206-209.

大山牧子, 上原さおり, 松波智耶, 吉川さわ子, 山本直子 (2007). 低出生体重児における乳房からの哺乳行動の発達評価. こども医療センター医学誌, 36(4), 220-222.

大山牧子, 上原さおり, 松波智耶, 鈴木奈恵子, 廣田とも子, 阿部理恵, 山本直子 (2008). 低出生体重児における乳房からの哺乳行動の発達評価. こども医療センター医学誌, 37(4), 210-213.

大山牧子 (2010). 第2版NICUスタッフのための母乳育児支援ハンドブック—あなたのなぜ?に答える母乳のはなし—. 6-193, メディカ出版, 大阪

乙坂恵美, 大川理恵, 佐藤明美, 加藤幸代 (2014).

直接授乳支援に対する実態調査. 砂川市立病院医学雑誌, 27(1), 9-10.

佐藤奈々加 (2014). 早産・低出生体重で生まれた児をもつ母の不安を軽減する為の関わりを振り返って. 川崎市立川崎病院事例研究集録, 16回, 75-80.

瀬川雅史 (2015). 第3章 乳児の栄養 6 母乳育児の利点. NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編: 母乳育児支援スタンダード第2版. 65-73, 医学書院, 東京.

島袋史, 宮城雅也, 安慶田英樹, 島袋智志, 天久憲治, 當間隆也, 前花亜紀 (2005). 早産児における直接授乳とビン哺乳の呼吸循環動態への影響の比較. 沖縄の小児保健, 32, 7-13.

杉村千春, 仁科朋子, 加藤美保, 達家好美 (2012). NICUにおける育児指導の実態調査と評価の分析—院外出生の親子への指導を振り返って—. 藤枝市立総合病院学術誌, 18(1), 67-72.

谷崎望, 石田悠里, 虎谷早紀子, 宮本律子, 紙尾千晶, 能登真里子, 西田牧子, 田淵紀子 (2015). 超低出生体重児の母親が長期搾乳を継続していく中で抱く思いと継続を支える原動力. 日本看護学会論文集: ヘルスプロモーション, 45, 159-162.

時田彩子 (2011). 低出生体重児の母乳育児確立に向けた支援について. 相澤病院医学雑誌, 9別冊, 19-21.

當間紀子, 友利美和子, 渡慶次牧子, 棚原やよい, 比嘉京子, 石原智美, 比嘉勝美, 宮城雅也, 島袋史 (2005). 母乳分泌維持, 早期直接哺乳の確立にむけて—NNSの導入前後を比較検討して—. 沖縄の小児保健, 32, 33-36.

當間紀子, 友利美和子, 渡慶次牧子, 比嘉京子, 前津里沙, 平田貴子, 石原智美, 長岡弘子, 比嘉勝美, 宮城雅也, 島袋史 (2007). NICUにおける母乳育児支援への取り組み—直接授乳からの経口哺乳開始とNNSの積極的導入について—. Neonatal Care, 20(2), 195-206.

堤美恵, 藤本栄子, 黒野智子, 神崎江利子, 相羽訓子 (2010). NICUに入院した早産児の母親の搾乳の体験. せいれい看護学会誌, 1(1), 9-16.

宇田梨沙, 村上志保, 入口恵津子, 平田美美, 佐藤雅代, 竹中由美子, 佐藤美幸 (2012). 早産・低出生体重児の授乳開始はいつから可能か?—早期授乳を試みて—. 済生会吹田病院医学雑誌, 18(1), 72-76.

渡辺めぐみ, 樋口善之, 松浦賢長 (2009). 母子分離状態における母親の搾乳回数・搾乳量と産後1ヵ月の児の栄養法との関連. 母性衛生, 50(1), 125-131.

山口直人 (2015). 第9章 特別な支援を必要とするとき—赤ちゃん 22 早産児・低出生体重児. NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会編: 母乳育児支援スタンダード第2版. 296, 医学書院, 東京.

横尾京子, 宇藤裕子, 木下千鶴, 長内佐斗子, 村木ゆかり, 栗野雅代, 岡永真由美, 高田昌代 (2008). NICUにおける母乳育児指導に関する実情と課題. 日本新生児看護学会誌, 14(1), 40-47.

受付: 2015年11月30日

受理: 2016年2月26日